

日系米国人コミュニティの形成と仏教福祉

中 垣 昌 美

(龍谷大学文学部教授)

はしがき

日本人の米国移住者は、中国人の苦力労働者の排斥によって生じた労働力需要に対する代替的役割をになわされた形で登場し、十九世紀末より二十世紀初頭にかけて米国移住の大量化が見られた。すなわち、一八九〇年代から一九二〇年代にかけてのほぼ三〇年間で、戦前における米国移住時代を形成したものと注目してもよいと同時に、米国に

おける日系人コミュニティの歴史的・社会的基盤を確固たるものとしたといつて過言ではない。日系人コミュニティの形成は、初期移民時代に渡米した单身又は独身の未組織

出嫁ぎ労働者による日本人コミュニティからの脱皮を意味する。言い換えれば、一九一〇年代に写真結婚方式による迎妻又は一時帰国による迎妻によって新家族の形成をもたらし、その結果出生した二世たちの激増によって、いわば日系人コミュニティの急速な発展を可能にしたのである。その日系人コミュニティ形成の特徴について、つぎのように整理しておくことにする。

① 新家族の形成によって職業移動が顕著となり、農業労働者から借地耕作者ないし土地所有者や自営業者へと転向する傾向が強い。すなわち家族労働力を中心に自営的に営むことが可能になったことを示すものである。

② 自営業者はグロサリー、湯屋、ホテル、ボーディングハウス、理髪業、食堂、洗濯屋、花店、ナーセリー、雑貨店等、主として日本人とその家族のみを対象とする零細自営業であった。

③ 日系人子女の出生と成長にともなって、日本語教育機関としての日本語学校の設立が著しくなった。同時に、宗教的情操教育機関としての仏教日曜学校又はキリスト教日曜学校も盛んになった。

④ 日系人子女の出生率に比例してその死亡率も上昇し、乳幼児の葬儀が激増した。このことは医療・生活環境の低劣性を裏付けている。

⑤ 家庭内における夫婦葛藤、不和、紛争をはじめ、遺棄、暴行、自殺といった家族病理的現象が増大した。しかし子女の非行現象は、集団指向型コミュニティにおける社会的凝集性に起因して非行抑制機能が促進された結果、ほとんど見られなかったのである。

⑥ 子女出生は母国日本からの独立や米国永住の意志決定条件にはつながらず、錦衣帰郷を前提としながら、親族共同体的親和連帯を維持存続することにつとめた。

⑦ 伝統的集団指向型コミュニティの形成と維持存続は日本国民としての日本社会への強い帰属意識を保持することとなり、彼等の文化的・言語的障害ともあいまって、米国社会への社会的同化や帰化に対する態度はむしろ消極的ないし否定的であったのである。同時に、日系人相互間における自発的な相互扶助と親和連帯は極めて強く、米国の公的社会福祉の受益対象になることを恥とさえかんがえた。

⑧ 日系人コミュニティの統合化について主導的役割をになってきたものは、日本人会、県人会、並びに仏教会である。日本人会は日本人の権利保護と福利増進を目的とする唯一の公的機関としてコミュニティに生起する種々の諸問題を調整する役割をはたし、県人会あるいは郷友会は親睦と生活向上をめざして地縁的結合を維持存続させようとする任意的、自主的な相互扶助集団である。それに対し、仏教会は異国における社会的抑圧のなかで伝統的日本農村共同体を共通の背景として共有する宗教的・文化的価値ないし規範の保持にむけられた法縁的結合によって、コミュニティの内的要請から結成された自発的、

主体的な組織集団である。

このような日系人コミュニティは、△帰化不能の外国人▽として烙印化された出嫁ぎ型海外移住労働者にとつて、同一言語・同一文化・同一民族という社会・文化的共通性にもとづく親和連帯性、同質性、熟知性、地縁性、ならびに法縁性によって、彼らみずからのアイデンティティを保持することが出来る唯一の生活の場であつたのである。そして、彼らはみずからの社会的地位を日系人コミュニティ内においてのみ保全することができたのである。このことはとりもなおさず彼ら自身の生活の安全と安定を保障する手段として不可欠の条件でもあつた。さらに彼らのコミュニティづくりは、出嫁ぎ志向の強い移民労働者の定住化に始まるが、その歴史的・社会的過程において主要な要因をなすものは彼らの結婚による新家族の形成にあつたと言えるのである。

筆者は、この日系人コミュニティの形成過程を観察する上で、コミュニティづくりにかかわつて仏教会の果たした役割を浮き彫りにし、仏教社会福祉学研究の一視角として考えてみたい。その一つの手掛りとして、現在の日系米国人

表1. 米国における日系人人口 1890~1940 (地方別)

	1890	1900	1910	1920	1930	1940
New England	45	89	272	347	340	340
Middle Atlantic	202	446	1,643	3,266	3,662	3,060
East N.Central	101	126	482	927	1,022	816
West N.Central	16	223	1,000	1,215	1,003	755
South Atlantic	55	29	156	360	393	442
East S.Central	19	7	26	35	46	43
West S.Central	42	30	428	578	687	564
Mountain	27	3,107	10,447	10,792	11,418	8,574
Pacific	1,532	18,269	57,703	93,490	120,251	112,353
Washington	1,360	5,617	12,929	17,387	17,837	14,565
Oregon	25	2,501	3,418	4,151	4,958	4,071
California	147	10,151	41,356	71,952	97,456	93,717
Total	2,039	24,326	72,157	111,010	138,834	126,947

資料: The United States Bureau. of the Census Reported in Jhon H. Tolan (Chairman), Finding and Recommendations on Evacuation of Enemy Aliens and other from Prohibited Military Zones, Table 6, p.96.

In Forrest E LaViolette, *Americans of Japanese Ancestry*, — A Study of Assimilation in the American Community, N.Y.; Arno Press, 1978, p.36.

コミュニティにおいて最古で最大の宗教教団である八北米
仏教団（浄土真宗本願寺派）の開教使の果たした役割と地
域組織化活動について検討していきたい。

1

日系人コミュニティの歴史は、一九〇〇年までに米国本
土の西海岸域に移住した約三、〇〇〇人の日本人移民と、
一九一〇年より一九二〇年の間にさらに移住した
約七〇、〇〇〇人という大量の移民の定住によつてはじま
る。彼らの住んでいた地域別人口分布を、（表一）によつて
明らかにしておこう。

この表にあらわれているように、在米日本人人口の動態
は一八九〇年から一九〇〇年の十年間に十倍、さらに
一九〇〇年より一九一〇年までの十年間には三倍という
驚異的な膨張を示したこととなる。このことはすでに、
一九一〇年に中国人口動態を逆転させて優位にたち、
一九二〇年代以降は日本人人口が中国人人口のほぼ二倍を
占めるに至っている。さらに、地域別にみても明白なよう
に、太平洋沿岸に位置するワシントン・オレゴン・カリフォ

ルニアの三州に集中している。そして、在米日本人のカリ
フォルニア居住集中度が極めて顕著であり、一九〇〇年に
四、七%を占めていたものが、一九一〇年には五、三%、一九
二〇年には六、八%、一九三〇年には七、九%と着実に伸び、
一九四〇年には三、八%に達し、太平洋沿岸三州に六、五%と
いう日本人が集住するという結果をもたらしている。この
地域的分布に符合するかのように仏教会の所在もカルフォ
ルニア州に最も多く見られるのである。

そもそも、北米における日本仏教、すなわち浄土真宗本
願寺派教団の開教伝道は、一八九八年サンフランシスコ仏
教会を設置したことに始まる。ついで、一八九九年にサク
ラメント（Sacramento）、一九〇〇年にフレズノ（Fres-
no）、一九〇一年にシアトル（Seattle）、一九〇二年にサ
ンノゼ（San Jose）、一九〇三年にポートランド（Port-
land）、一九〇四年にオークランド（Oakland）、一九〇五
年にロスアンゼルス（Los Angeles）、バンクーバー
（Vancouver）なぐびにハンフォード（Hanford）、一九〇六
年にワッソンビル（Watsonville）、一九〇七年にスタク
トン（Stockton）、一九〇八年にガダループ（Guadal-

upe)、一九〇九年にベーカースフィールド (Bakersfield) ならびにバカビル (Vacaville) というように、一九〇〇年のはじめ十年間に毎年飛躍的に、しかも太平洋沿岸の主要都市のすべてに仏教会の設置を見ることができ、一九一〇年以後は、さらに領域を拡大し、ユタ州ソートレーキ (Salt Lake, 一九一三年) やコロラド州デンバー (Denver, 一九一六年) にまで躍進している。このようにして、一九三〇年までに三五の仏教会を各地日本人コミュニティに設置し、宗教的、文化的、教育的、社会福祉的センターとして重要な機能と役割をはたしてきたのである。

2

一例を足利浄円師にとってみると、彼がサンノゼに來住したのはおそくとも一九〇二年 (明治三五年) の春であり、彼が二五歳の時であった。そして、最初は白人の家に住みこんで皿洗いなどして苦勞したが、やがて一室を借りて自活し、同年八月二八日にはすでに仏教青年会を設立している。⁽¹⁾そして、当時の海外移住の主流を占めていた日本人の単身又は独身の青年労働者に対する布教伝道をはじめ、

世話・相談活動や親睦・リクレーション等の社会活動、その他の文化活動を推進したのである。彼ら労働者にとって、仏教会は唯一のコミュニティセンターであり、同じ言語で共通の課題を語り合うことのできる最も有効な社会資源であったのである。足利師の『一樹の陰』の中に、次のような追憶が記されている。「サンノゼ駅から汽車にのって、ロスゲタス (Los Gatos) の町についたのが午後一時であつた。それから馬車をやとつて、十四マイルほどの山奥で木材きりだしの仕事で事故死した日本人の死体を受けとりにでかけた。冬の寒い日であつた。そこに居残っていた三十名ばかりの同胞と、その山の中で心ばかりの葬式をしましたのが午後四時すぎであつた。それから再びロスゲタスにもどつたのが夜の十時すぎであつた。その時には、もはやサンノゼにかえる汽車はなかった。やむなく中国人のある小さなホテルに泊つたが、思いがけない馬車賃やホテルの支払で、朝食する金もなく、もちろん汽車賃もないようになつていた。私は、ほんとうに困つた。ついに徒歩でサンノゼにかえることに決心しなければならなかつた」。⁽²⁾

この短い文章の中にも、開教初期当時のきびしい状況が

雄弁に物語られている。汽車、馬車でなければ徒歩によって、不便な山奥の日本人労働者キャンプを訪問することだけでも大変なことであつたはずである。政治的亡命でもなく、宗教的自由を求めている移住でもなく、一時的に海外出稼を試みたにすぎなかつた日本人労働者にとつて、米国はいまだ永住の地と考えられることはできなかった。あくまでも錦の着物をきて帰郷することが「成功者」の栄光ある姿であつたから、米国は依然として外国であり、一時的な滞留地であり、蓄財の可能な労働の場でしかなかった。そして、労働契約以外はすべて日本政府の保護下にあると考えられた。ごく一部の人を除いて、大部分の日本人は永住はもちろん、米国における新家族の形成すらも考えていなかったのである。英語力の不足という文化的言語上の障害もあつたけれどもそれ以上に故郷を思い、成功者として帰国することを夢めることが強ければ強いほど、米国に同化することはなかつたのである。「帰化不能の外国人」として烙印化されればされるほど伝統固執型日本農村コミュニティを形成した。そして同一民族、同一言語、同一文化という社会的・文化的共通性にもとづいた親和連帯と同質性

にもとづく共通なる行為様式を優先させ、伝統的な農村共同体を形成した集団指向性によって、社会的凝集性を維持強化したのである。このような内在的要因に対して外在的要因として考えられることは、排日差別の煽動化や限られた範囲の職業が零細な自営業という就業上の制約などによって、米国における日本人労働者にとつてアメリカ市民と同等の権利と社会保障を期待することが困難であつたことをあげることができる。彼等は、日本とのかかわりをより一層緊密化し、日本人会、県人会、仏教会ならびに日本人だけのキリスト教会を作り、非同化・非米化の封鎖的人種集団を形成していったのである。また、零細自営業を食料品、洗濯屋、食堂、菓子屋、薬局、写真スタジオ、宝石店、乾物屋、靴修理屋、旅館やアパート、花店、理髪店、美容室、ガソリンスタンド、洋裁店等のビジネスに求めたが、すべて日本人コミュニティ内において営業したものであつた。このようにして、サンフランシスコ、シアトル、タコマ、ポートランド、ワッソنبル、サンノゼ、フレズノ、ロスアンゼルス等の都市に日本人街ができ、その周辺の農村地域に労働する日本人労働者たちを吸収した。同時に日本人

街の周辺区域に仏教会が建てられた。再び、サンノゼに例をとってみると、『北米開教沿革史』は「一八九〇年ごろから果物摘集期の一時的出稼ぎ労働者として来住しつつあったが、一八九七年ごろ十人ほどの日本人が果樹野菜園の経営をはじめた。一九〇二年にサンノゼ在住のサンタクララ郡在住の日本人は数百となり、とくに収穫期にはおよそ三千人を数える程となったので日本人街ができ、また仏教会聖堂の実現をみた」と記述している。⁽³⁾同時に一九〇〇年前後の仏教会動向を見れば、一九〇〇年一月サンフランシスコ仏教会を中心に白人伝道を開始し、外人仏教研究会を発足させたり、慈善部・人事周旋部を開設したりしている。さらに、機関誌『米国仏教』第一号を一九〇〇年一月三〇日に発刊すると共に翌一九〇一年四月には英文機関誌『法の光』を発刊し、フレスノ、バカビル、シアトル、サンノゼの各地で精力的に仏教青年会を組織化していることがうかがえる。その後一九〇六年八月にサンノゼ仏教会初代開教使として正式に本山から赴任してきた高橋豊念師は当時の苦勞を次のように記述している。

「当仏教会創立五ヶ年以來、熱心な開教使が駐在されて

きたがほとんど短期駐在のため積極的な方策をとることはなかった。しかし、今や移民同胞は日に日に増加し、六〇〇〇にもおよぶようになった。今回、自分がサンノゼ仏教会駐在を命ぜられ、在米同胞の心気は積極的になり、着任早々會堂建築の決議をみるにいたった。そのためサンノゼを中心にして各郡村数十マイルの遠隔地に、日本人同胞の住宅はもちろん桃園、りんご園、ぶどう園、大根園、ポテト畑等の各農園に労働している仕事場にまで足を伸ばして寄付金の募集につとめた——中略——各地の労働キャンプを訪問し、同胞の朝食は如何にと心をとめて注意してみると、目もあてられないほどで、朝夕豚小屋と同じような小屋に寝食し、不自由を忍んで労働に一日一弗の賃金を得、これを浪費せずに貯蓄し、故郷に送金し、妻子より寄せられる一片の感謝の手紙を身につけて朝夕いっしょうけんめい労働に従事しているのである——」⁽⁴⁾

このような記述からも、当時の日本人労働者が如何に低賃金、重労働、長時間の低劣な労働条件のもとで苦勞しながら貯蓄し、送金した上、さらに仏教会建設のために努力したかが明白にうかがうことができる。

さらに、仏教会に保存されている過去帳によってその当時の社会的状況を認識することができる。サクラメント市に例をとってみよう。一九七二年版『北米毎日年鑑』によれば、サクラメント在住の一世二九八人の出身県調査で上位五位にあげられるのは、広島（七六・三六〇％）、山口（四一・五〇％）、和歌山（四一・三〇％）、熊本（二三・七〇％）ならびに愛知（二六・六〇％）であり、ついで岡山、鹿児島、高知、福島、福岡等が続いている。⁽⁵⁾このような出身県別人口分布を反映しているかのように、サクラメント別院の一九〇〇年度過去帳に記録された二〇人の死亡者の出身県別分布は、熊本六、広島五、愛知四、和歌山三、山口一、福岡一となっている。戦時転住所への強制立退によって、戦前・戦後の人口移動が多少見られるとしても、サクラメント地方には早くから熊本、広島、山口、和歌山等の各県人が移住していたことが明白である。過去帳はさらにくわしく死亡年齢と死因を教えてくれる。二、三の例をひろってみ

よう。

* イースト・パーク労働キャンプ内で盗賊によって射殺される（一八九九年一月二六日）

* 農園で作業中、木から転落し死亡（一九〇〇年三月二四日）

* ウッドランド日本人労働キャンプにて、三四歳の男性、脚気のため死亡

* バカビル地区で二一歳の男性、熱病のため死亡

* サクラメント市の日本人経営の下宿屋で肺病のため死亡

このような記録から、当時の労働者が如何に無理をして重労働を続け、農園や鉄道で熱病にたおれたり、栄養不足や疲労のために脚気や肺病にかかって死亡したかを知ることができる。そして、渡米後の期間も短かく二十歳代や三十歳代の若い未婚男性が錦衣帰郷の夢をはたさずに死亡していることは悲しく哀れであり、医療や医薬の欠乏によるケースも見逃すこともできない。しかも家族を持たない彼等独身労働者たちのために、同県人や同村人たちが二、三人ないし数名集まって葬式をいとなんだり、知人や友人の

世話で葬式をしたり、愛知クラブなどの県人会や日本人会が世話をしたり、仏教会の開教使が親身になって協力していたことは、社会的凝集性による親和連帯や相互扶助ならびに隣保相扶の自発的組織を保持する日本人コミュニティであることを示すものである。よくコントロールされた秩序ある日系人コミュニティ形成の統合化に果した仏教会の調整的役割は極めて大きかったとも言えるのである。御香奠をおくるといふ仏教的慣習も、葬送に対する費用負担の一方法であり、相互扶助に支えられたものであった。

過去帳によって、すでに三歳になる二世女子が死亡していることを認知することができることから、一九〇〇年には日本人家族が移住していたことを物語るものである。医療設備や医療制度が未整備である上に、生活環境や衛生状態も良くなかったと思われる労働キャンプ内の家族生活は、特に子どもを育てる条件としては恵まれたものではなかったと言える。一九〇〇年中頃から一九一〇年代における二世出生数が増大化する時期の過去帳をみれば明らかのように、生後二日目とか生後一カ月とか嬰兒や幼児の死亡が著しく多い。助産婦や医師の数も少なく、何の知識も持

たない夫の介助で出産したり、労働過重のために難産であったり、産後の回復が悪かったり、嬰兒や幼児の疾病・症候群に気付かなかつたり、看病や治療に欠点があつたり等、医療、住宅、生活、文化の低劣な環境条件を示していると同時に、社会福祉に関わる援護や扶助も皆無であつたのである。彼等労働者家族を支えるのは、基本的には自助の原則しかなく、一切の社会的保護も慈善も期待することはできなかったのである。友人、先輩、同郷人ないし親類縁者の間で交換される相互扶助や援助パターンは温情や同情にもとづく私的で一時的なものであり、多かれ少かれ、与える者と与えられる者との間に恩義又は遠慮は避けられないものであった。

しかしながら、コミュニティレベルの組織的な慈善事業は殆どなく、大部分はキリスト教会や佛教会における會員相互の扶助、世話、慰撫、相談ならびに開教使や牧師等の善意などによって代替されていたのである。中でも、一八九九年にサンフランシスコの桑港仏教会において、開教の付属事業として「慈善会」⁽⁶⁾を発足させ、仏教会會員相互の賑恤救助をはかると共に、ノーマン医師による罹病者

の診察を開始していることは注目してよい。もしコミュニティレベルの組織的慈善事業として代表されるものがあるとするば、一九〇一年にサンフランシスコ総領事館を中心として結成された「加州日本人慈恵会」であろう。これは在米日本人の増加に比例して疾病による困窮者の救助、貧困家族や病人の治療ならびに日本送還、孤児の保護と育成、不時の災厄に対する応急救護、貧困者の葬送や建墓等の社会的ニーズが増加したので、在留婦人（とくに領事館、正金銀行、三井物産、東洋汽船関係の婦人）や宗教家の活動を主体として基本金二、四〇〇弗でスタートしたものである。しかし、一部の限られた篤志的な婦人ボランティア活動に終始し、コミュニティメンバーの全体的参加は見られなかった。

特筆できることは仏教会開教使や関係者らを含む慈恵会がキリスト教牧師らと共に尽力し、日本人共同墓地をサンマテオ郡コルマにつくり、無縁塚をも加えたことである。現在もなお、この慈恵会は墓地管理を中心に活動を続けている。

社会保障や社会福祉が整備されていなかった時代に仏教会は単に宗教儀礼や儀式行事のための建築物でなく、日本

人コミュニティの発展と共に成長し、住民の憩いと安らぎを与えた福祉センターでもあったのである。住民が日本人から日系米国人に質的变化をきたしても、仏教会はいまだ住民相互のコミュニケーションの場であり、ある時は親睦と談合の場であり、聞法と連帯の中核的機関としての役割と機能を果たしてきたことは否定できない。

おわりに

米国における仏教会組織は、むしろ、日本人コミュニティの要請によって達成し、その原動力は日本人労働移住者みずからの主体的契機によって形成されたものであった。すなわち、海外仏教伝道の拠点として仏教教団が巨額の出資をして設立したものではなく、宗門の積極的海外伝道政策によるものでも、海外移民援護策を試みたものでもなかった。当時の本願寺教団は朝鮮・支那方面への開教事業に経費多端を極めていたこともあり、また米国・ハワイの距離は遠く、さらにキリスト教団における仏教蔑視の風潮や労働者キャンプの風紀紊乱等米国・ハワイの開教事業

には消極的態度を示してきたいくつかの要因をあげることができる。⁽⁷⁾しかし、労働移住者の多くは広島、山口、熊本、福岡の各県出身者であり、浄土真宗の法縁に恵まれた生活環境の中で幼少年期を送っていたこともあって、本願寺への開教使派遣に関する嘆願を実現させたのである。明如宗主の英断により宮本恵順、本田恵隆両師の米国への視察派遣が実現したが、本願寺教学参議部の決断は鈍化し、結局赤松連城師の折衷案（開教の名を改めて桑港に開教使を派遣するの件）によって、当時の文学寮長蘭田宗恵、西島覚了の両師が派遣され、正式に米國開教の端緒を発見したのである。⁽⁸⁾

初期の開教使には、布教伝道に熟達した優秀な学者や実践家が多く、日系人コミュニティにおける教育的・文化的リーダーとしての資質と能力を保持していた。そして、通訳、代筆、結婚斡旋、職業紹介、コミュニティにおける不和・紛争の仲裁、慰撫、相談等の援助活動に関与することによって、コミュニティ内の秩序保持、組織化、統合化をめざした地域福祉組織化活動を展開し、民間性、仏教性、固有性を具備した仏教福祉活動を促進助長させたことは、

特筆すべきであろう。そのことによって、戦前より戦後にいたるまで仏教会は日本人労働者ないし日系米国人家族に対するコミュニティセンタールの役割をも果たし、不特定多数の地域の日系人子女に対する日本語教育、宗教教育をはじめ、日系人家族の慰安、娯楽の場としても機能したのである。当時の日系人コミュニティは在宅ケアの必要はなかった。独身又は単身の出稼ぎ労働者が主流をなし、第二世の誕生期又は養育期にあったことから、むしろ、育児に欠ける児童の保護や家族崩壊を防止する家族ケースワークを必要とした。ロスアンゼルス⁽⁹⁾の仏教婦人会活動として「小児保育所」や「婦人寄宿所」の開設（一九〇七年）をみるとができるが「ケア提供者」(care giver)「資源の動員者」(mobilizer)の役割をはたしたものと評価できよう。それに対し、仏教開教使の地域福祉にかかわる役割として主なもの「仲介者」(broker)として連絡調整 (liaison) の機能をはたし、「調停者」(mediator)や弁護者 (advocator) の役割をも担ったものといえる。しかし、無権利状態におかれた日系人に対し、諸権利の回復を図ることは極めて困難であり、仏教会はむしろ「調停者」としての役

割を日系人コミュニティ内においてのみ果したものと考えてよい。戦後処理期には戦時転住所より出所してきた日系人家族に対する住居提供や職業斡旋にも協力している。しかし究極的には日系人コミュニティ秩序内の仏教会であり、米国全体社会への同化度は低く、日本仏教の延長線上におかれた弱小宗教集団であることに変わりなく、今後宗教的にも、社会的にも米国仏教としての脱皮化と確立化がどのようになされていくのか注目したい。

(注)

- (1) 西元宗助著「サンノゼ仏教会と足利浄円師」、「光を聞く―北條恵実還歴記念論文集―」、非売品、昭和四十六年六月、京都・永田文昌堂、一一六頁所収。足利浄円師はサンノゼを本拠として伝道布教につとめられ、サンノゼ仏教会の基礎づくりをされたが、桑港大地震のあった一九〇六年の春、京都本山から派遣されてきた伯父足利瑞義師とあい、その年の五月末には、師の義兄にあたるハワイ開教監督今村恵猛師のかねての要請もあってホノルル駐在の開教使に転じられたのである。

(2) 『同右書』一一八頁。

- (3) 寺川抱光編『北米開教沿革史』、昭和十一年（一九三六年）四月、本願寺北米開教本部発行、一〇一頁。
- (4) 『亜米利加』第一一卷二号、一九〇七年発行、三四頁。
- (5) 『北米毎日年鑑』一九七二年版、北米毎日新聞社発行、Horiuchi, Isao, *Americanized Buddhism : A Sociological Analysis of a Protestantized Japanese Religion*, Ph. D. Dissertation at U. C. Davis, 1973, p. 407 所収。
- なお、この統計は世帯主の出身県を調査したものであるから、サクラメント市の一世帯数は二九八世帯教であるといえる。またこの総数には二世世帯は含まれていない。
- (6) 『桑港仏教会開教三十年記念誌』、昭和五年六月、桑港仏教会文書部、八三頁。
- (7) 『布哇開教誌要』一九一八年、本派本願寺布哇開教教務所文書部発行、二八頁以下。
- (8) 『桑港仏教会開教三十年記念誌』、昭和五年六月、桑港仏教会文書部発行、五頁。
- (9) 千葉乗隆編『仏教婦人会百五十年史』、昭和五十七年、仏教婦人会総連盟発行、巻末年表参照。